

社会科学 としての 保険論

芝田進午 監修 本間照光・小林北一郎 著

汐文社

社会科学 としての 保険論

芝田進午 監修 本間照光・小林北一郎 著

汐文社

著者略歴

本間 照光 (ほんま てるみつ)

1948年 北海道に生まれる
1971年 小樽商科大学卒業
保険会社に8年間勤務の後、退職
現在 日本保険学会会員，社会科学研究セミナー
会員

小林北一郎 (こばやし きたいちろう)

1899年 北海道オホshima路郡塩谷村（現，北海道小樽市塩
谷町）に生まれる
1922年 小樽高等商業学校卒業
1924年 東京商科大学卒業
1924年 横浜火災海上保険株式会社入社
1944年 東京都杉並区の救世軍療養所において死亡
（享年44歳）

社会科学としての保険論

一九八三年五月一〇日

第一版第一刷発行

定価 一八〇〇円

監修 芝田進午

著者 本間照光

小林北一郎

発行者 吉元尊則

発行元 株式会社汐文社

〒113 東京都文京区本郷
一ノ二六ノ十 中村ビル

電話〇三三八二五八四二二
振替（東京）二二四一五〇

印刷 (株)興英文化社

製本 東京美術紙工

オフセット印刷 太陽印刷 装幀 オーク

社会科学としての保険論 ● 目次

監修者の序文

芝田 進午

第二部 経済学における保険研究の復権

本間 照光

——小林北一郎氏の保険学批判体系——

I	問題の提起	20
II	経済学からの保険論の欠落	29
一	経済学の通説における保険の取扱い	29
二	通説の保険理解の許される根拠	31
三	保険学の系譜と問題点	34
III	小林北一郎氏の保険学批判体系	43
一	社会科学としての最初の保険研究	43
二	保険学批判体系の概要	45
IV	社会科学としての保険研究の展望	67
一	経済学批判プラン体系における保険論の展開	67
二	社会の発展史と保険	80
V	おわりに	91
	——社会科学諸分野におよぼす保険研究の意義——	

——偶然性と必然性との統一的存在としての保険制度——

1 序 説 124

2 偶然性 129

3 必然性 131

4 偶然性と必然性との統一 136

二 Underwriting の非社会的性質 138

——保険制度と社会的生産力との関係の考察の一部——

1 リスク選択ということ 139

2 保有額決定ということ 142

3 結 語 147

三 再保険制度の本質について 148

——再保険制度の社会経済的研究——

1 序 説——問題の所在 148

2 再保険制度の発生 150

3 再保険制度運用の技術 153

4 再保険制度の発展とその自己否定的傾向 161

5 結 語 164

IV 金融資本としての保険資本……………168

一 保険企業の競争と独占 168

——利潤よりの人間解放——保険よりの人間解放——

1 序 説 168

第二部 社会科学と保険学批判体系

小林北一郎

I 保険制度の発生・発展・消滅の過程……………98

——物質的生産力の発展と保険制度——

1 開序 98

2 原始共産社会と保険制度 100

3 保険制度の発生 101

4 保険制度の肯定的発展 104

5 保険制度の否定的発展 107

6 保険制度の消滅（保険の社会化） 110

7 結語 111

II 保険経営形態の発展……………112

——保険制度と物質的生産力との関係の考察への一節——

1 序説 112

2 営利的経営形態 114

3 非営利的経営形態——相互保険組織 118

4 公営保険形態 121

5 結語 122

III 保険制度を構成する物質的基礎……………124

一 保険制度における偶発性と必然性 124

V

保険学批判

一 保険学説の発展とその階級性

196

——ブルジョア保険学批判——

- 1 保険の本質への接近 196
- 2 損害説の発展と批判 197
- 3 非損害説の発展 203
- 4 損害説の再生 210
- 5 日本における保険学者の保険本質論 211
- 6 結語——保険本質論の階級的性質 212

二 保険学批判の方法 216

——附、保険学批判の体系素描——

- 1 序 説 216
- 2 これまでの保険学方法への批判 217
- 3 保険学批判の方法 222

4	保険学批判体系	228
5	結語	231

あとがき	233
------	-----

凡 例

本書第二部について次の編集を行なった。

- (一) 保険学批判体系Ⅰ～Ⅴの表題は、本間の責任において記した。
- (二) 各論文名および章節については、原則として小林北一郎の発表時の論文によった。小林が明示していない場合は、本間の責任において記した。
- (三) 旧表記は、新表記に改めた。なお、仮名の送りや、漢字を平仮名に改めるなど、編集技術上の若干の修正を行なった。また、明らかに誤植と思われる字句上の訂正も行なった。
- (四) 本間による注記は「」で示した。

監修者の序文

一

『社会科学としての保険論』と題する本書の監修者に、なぜ、わたくしのごとき者がなっているのか。なぜ、わたくしが序文を書くことをもとめられるようになったのか。その経過を説明することから、この序文を書きはじめることにしたい。

まず、私的な事情を紹介することになって恐縮であるが、一九七五年、わたくしは、各方面の研究者の御協力を得て「マルクス主義研究セミナー」（のち「社会科学研究セミナー」と改称）という研究運動をはじめた。その目的の一つは、現に労働しつつある勤労者のために大学レベルないし大学院レベルの社会科学研究の機会と場所を提供し、そのことをつうじて、参加者がみずからの労働とその意味について理論的にも実証的にも自分で研究する能力を形成することに、ささやかながら寄与することであった。わたくしが、みずからの非才にもかかわらず、あえてこのような目的をもつ研究運動をはじめた理由は、第一に、日本の現実、とりわけ労働者の労働の現実が理論的にもきわめて新鮮かつ重要な多くの

研究課題を提起していること、にもかかわらず、かぎられた人数の専門の研究者だけではそれらをカバーしきれなくなっているからであり、第二に、現に労働している勤労者こそ、鋭い現実感覚と問題意識、つよい理論的意欲をもっており、これらの課題にみずからとりこんでくれるにちがいないと期待したからであった。

このセミナーの研究活動には、これまで多くの勤労者・学生が参加し、わたくしの若き共同研究者になつてくださっているが、その一人が、本書第一部の著者、第二部の編者になつた本間昭光氏にはかならない。本間氏は、小樽商大を卒業して後、ただちに保険会社に就職され、八年間、保険労働者として勤務してこられた。この間、同氏は、多忙な業務のなかで、みずからの労働の意味を問い、「保険」とはなにかについて、着実な研究を蓄積しつづけ、やがて、前述のわたくしのセミナーに参加されるようになった。それから、しばらくして、同氏は、保険会社を退職して、高校教師に転職されたが、保険についての研究をつづけられた。そして、このセミナーで、社会における保険の位置、意義について、数回にわたり、研究報告をおこなわれた。それらの報告は、いずれもきわめて注目すべきもので、わたくしは眼を瞠った。そして、いくつかの助言をさせていただくとともに、それらを論文にまとめよう、おすすめした。それから数カ月たって、一九八〇年一〇月、本間氏は、わたくしのところに、それまでの研究を集成した論文を持参された。一読して、わたくしは、その現実感覚の鋭さ、理論水準の高さ、問題提起の新鮮さに深い感銘をうけた。そして、わずか三〇歳あまりの保険労働者だった人が、大学院で学んだわけでもなく、研究条件にめぐまれているわけでもないのに、日々の労働のなかで、このような労作を執筆したことに感嘆した。

それとともに、わたくしが感動させられたのは、本間氏が、小林北一郎（一八九九—一九四四年）というマルクス主義経済学・保険学のかくれた先駆者を発掘し、その理論的遺産をあきらかにし、体系的に再構成したことであった。本書の第一部であきらかにされているように、小林北一郎氏は、一九三〇年代の弾圧きびしい時代に、独力でマルクス主義の保険理論の体系化につとめた人で、伊藤整や大熊信行とも親交があり、おそらく小林多喜二にも政治的・思想的影響をおよぼしていたのではないかと思われるすぐれた先人であった。しかし、小林北一郎氏は、惜しむべし、太平洋戦争中、日本帝国主義の敗北をみることなく、苦難のなかで病死された。ひきつづき、ケイ夫人と子息・盈が病没され、あとには當時わずか八歳の子息・明だけが遺児としてのこされた。本間氏は、いろいろ苦労しつつ、こうしたことをもしらべて、東京と小樽・札幌のあいだを往復され、小林北一郎氏の論文をさがし、またその遺児をさがしもとめられた。そして、ついに成人されていた遺児、小林明氏にめぐりあい、父だった人の業績が、本間氏をつうじて、その遺児につたえられたのである。本間氏は、その論文を書くために、膨大な文献を渉猟し、研究しただけではない。まさにみずからの脚をつかって、調査旅行をおこなったのである。本間氏の小林北一郎氏への、また小林明氏への旅は、それ自体、ひとつのドラマといえるべきものであって、読む人をして深く感動させずにはおかない。

この本間氏の業績と、氏によって発見され、編集された小林北一郎氏の理論体系、その業績につよい感銘をうけて、わたくしは、両氏の業績をどうしても世に紹介しないではおれなくなった。いや、紹介することに微力をつくすことが、わたくしの義務であると思われてきた。けれども、本間氏が新人であり、小林北一郎氏が約四〇年前に亡くなった人であり、また「保険論」というテーマが社会科学におい

て不当に小さな位置をしかあたえられていないということもあり、さらにこの種の学術書の出版事情がきびしいということもあって、わたくしの努力は容易には実をむすばなかった。しかし、幸いにして、汐文社が本書の刊行の意義について好意ある御理解をせしめてくださったので、ここに、ようやく、本書が出版され、各方面の御検討をおおぐ機会ができることになった。

わたくしのごとき者が本書の監修者になることをもとめられたのは、こうした事情によるものである。本書の存在理由については、第一部、第二部がみずから語るであろうが、監修者としての責をはたすために、つぎにその意義について若干の感想をのべさせていただき、読者による御検討の参考にすることにしたい。

二

今年三月一四日、わたくしたちは、マルクス没後一〇〇周年の命日をむかえた。社会運動史、思想史、社会科学史をはじめ、各方面からみたマルクスの偉大な貢献、その今日的意義の大きさについては、わたくしがここで説明するまでもない。このことを前提にしたうえでのであるが、マルクスの理論は、当然のことながら、一〇〇%の完全さで完成されたものではなかった。そこで、後世のわれにのこされた研究課題としては、(一)マルクスがその生存中、理論的に十分に展開しえなかった未開拓の問題群を発見し、解決すること、(二)マルクス以後の歴史的に新しい諸条件、たとえば独占資本主義、国家独占資本主義、「現存する社会主義」、核エネルギーの出現等が提起する新しい問題群を解決す

ることがあげられる。もちろん、(一)の問題群と(二)の問題群は関連していることが多く、後者を解決するために、前者を解決しなければならぬ場合が少なくない。ここで、(一)の問題群のみに限定すれば、マルクスが、概念だけはいくつくり、使用したが、理論的にはほとんど展開できなかった領域がいくつものこされている。たとえば、「普遍的労働」「普遍的生産」「普遍的生産力」「生産の潜勢力」「科学的労働」「芸術的労働」「科学革命」「技術革命」「社会の共同業務」などの諸概念がそれである。これらは、マルクスの理論——経済学だけに限定するとしても——の体系的完成のためには不可欠のキー概念であるが、にもかかわらず、これまでのマルクス主義の通説では、ほとんど無視されてきた。こういうわけで、マルクスの理論は、経済学に限定するとしても、原理論的にみても、なお、未完成であるといわざるをえないのではないか。われわれには、なにがわからないかがまだ十分にわかっていないのではないか。このことが、マルクスを研究しようとする人びとによってまず熟考されるべきではないのか。わたくし自身、いつもこのように自戒し、自己反省してきたのであるが、このように、マルクスについての研究者が、なにがわからないかがわかっていなかった重要な問題群の一つが「保険」問題にはかならない。

本書の第一部は、ほかならぬこの問題の重要性を、わが国においても世界的にも、おそらくはじめて説明しようとする労作である。その冒頭にものべられているように、「保険」という領域は、すべての日本国民が、きわめて多様な形で、しかもきわめて高額な料金で、日夜、もっともきびしく収奪されている階級支配の主戦場の一つである。なぜ、そのような収奪が可能なのか。なぜ、保険が社会生活のすみずみにまで浸透しているのか。しかし、なぜ、それがほとんど研究されてこなかったのか。本間氏

は、この現実的・実践的課題から出発して、理論的にきわめて高度の水準の解明にむかってゆく。くわしくは、本論についてみていただくほかはないが、「保険」概念が、史的唯物論、経済原論、共同体論、剰余価値論、再生産論、蓄積論、株式会社論、金融資本論、保険資本論、国家論、共産主義論など、きわめて基本的で広範な諸理論分野の基礎にかかわっていること、社会科学の理論体系全体の構造にかかわる重要な問題をはらんでいることが、説得的に論証されている。とりわけ、(一)剰余労働を「保険ファンドおよび蓄積」に転化するものとして首尾一貫して把握すべきだという主張、(二)ブルジョア国家を「ブルジョア階級の相互保険会社」とみなすマルクスの規定の発見とその意義の解明は、これまでの経済学と国家論にたいするきわめて新鮮な問題提起といつてよいであろう。本問氏は、社会科学の理論体系の周辺部分にあつて無視ないし軽視されてきた「保険」という一概念をとりだし、復権させて、それを全理論体系のキー概念の一つに位置づけた。本問氏は、保険論を社会科学として体系的に構成する視点を提出しているだけではない。社会諸科学の全体を体系的に再検討する必要があるについても問題提起している。まことに大胆な問題提起であるといつても、過言ではないであらう。

三

本問照光氏の大きな貢献の一つは、みずからの理論的寄与とならんで、前述のように、小林北一郎氏の理論的遺産を発掘し、それを小林氏自身のプランにもとづいて、体系的に再編集し、本書の第二部にまとめた点にある。わが国の保険論研究史、社会科学研究史、マルクス主義研究史における重要な遺産